

注射薬について

薬剤師 齊藤 陽子

今回は注射薬についてお話しします。

注射薬というのは直接的に体内に薬剤を投入できるため、飲み薬や吸いこむタイプの薬、塗り薬よりも早く効くお薬がほとんどです。意識の無い重症の患者さんにも適切な治療ができます。

1. 注射業務～注射薬の管理

薬局では注射薬の品質管理と在庫の確保を行い、各部署へ注射薬をセットして送っています。



また、外来に注射を打ちに来る患者さんや入院患者さんの注射薬を 1 人分ずつセットしています。

一例

入院患者さん 1 人の 1 日分の注射薬



薬剤師は注射薬の指示がコンピュータに入力されると注射指示内容を確認し、複数の注射薬を混ぜる指示が出ている場合はそれらを混ぜてよい（配合変化）をチェックします。また、その薬に合った投与方法か、投与速度か、投与量はどうか等の確認を行います。薬によっては投与方法によって患者さんの治療に必要な薬剤量が異なるものがあるからです。注射薬と患者さんをつなぐチューブ（ルート）もその材質によって薬が吸着し、期待した量の薬が患者さんに投与できないことがあります。薬局ではそのような薬剤に注意文書をつけて看護師のサポートをしています。

2. 混注業務～点滴薬を混ぜ合わせる

薬局には高カロリー輸液の混合を行っているクリーンベンチがあります。クリーンベンチ内は清潔な環境です。特に細菌汚染に注意が必要な高カロリー輸液はここで混合し、点滴から細菌感染を起こさないようにしています。



クリーンベンチ

上部のフィルターを通った清潔な空気が上から下へ流れています。

また、抗癌剤は閉鎖された空間の安全キャビネットで調製を行っています。



安全キャビネット

キャビネットの中は手前から奥へと空気が流れていて、キャビネット内の空気は室内へ出てきません。

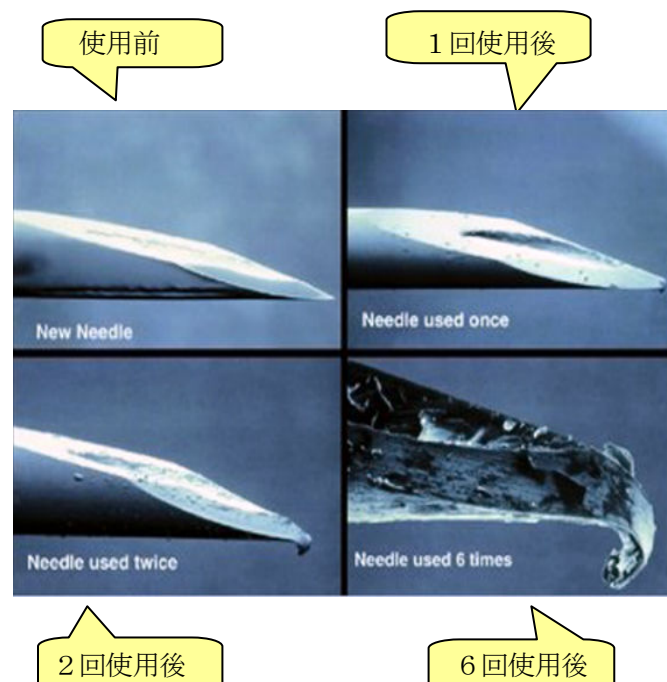
3. 自己注射

インスリンやある種のインターフェロン、成長ホルモン剤など患者さんが自分で注射できる薬剤があります。

インスリンや成長ホルモンには保存剤が添加されているので1日何回かに分けて注射することができます。

しかし、いつまでも使えるわけではなく、使い始めてからの使用期間は薬剤ごとに決まっています。薬の効果や汚染防止等の安全面からも使用期間は守って下さい。

自己注射を行う場合、注射針を毎回付け替えていただきます。今は注射針も細くなり、投与時にほとんど痛みを感じない製品が多くなっています。自分しか注射しないから・・・、面倒くさいから・・・、といって注射針を交換せずに使っている方を時々見かけます。針は皮膚に刺さると磨耗して針先が曲ってきますので、毎回新しい針で注射して下さい。



【針の磨耗の様子】

4. 最後に

これからインフルエンザ予防接種が始まります。インフルエンザの注射は皮下注射（皮膚組織の中）です。皮下では薬が毛細血管からゆっくりと吸収されます。注射部位を強く揉んでしまうと皮下の細胞がダメージを受けて薬が急激に拡がったり血管内に入ったりするため、局所反応（皮膚が赤くなる、腫れる、痛痒くなる等）やアナフィラキシー症状（呼吸が苦しくなる等の全身性ショック）を起こす可能性が高くなるといわれています。皮下注射の後は出血が止まるまで静かに注射部位をおさえるだけにして下さい。

薬局では飲み薬だけではなく注射薬に関する業務も行っています。直接注射薬のお話をする機会は少ないのですが、ご質問等ございましたらお気軽にお尋ね下さい。